



「細胞検査士」一癌の見張り役—を ご存じですか？

病理検査室 主任補 和泉元 雅子

人体は60兆もの細胞からできています。日々規則正しく働いている細胞の中で、生活環境やウイルス感染等の影響を受け、突如秩序を乱し暴れ始める細胞が現れます。これが癌細胞です。この癌細胞をいち早く探し出すのが「細胞検査士」で、細胞診を担う専門資格を持った臨床検査技師です。当院では4名の細胞検査士が目を見張っています。

細胞診に用いる検体は、子宮癌検診をはじめ、尿や喀痰のように人体から自然

に剥離した材料や、乳腺や甲状腺のしこりに針を刺して採取する穿刺吸引細胞診、気管支鏡や内視鏡ガイド下で病巣をブラシでこすって採取する擦過細胞診等、多岐に渡ります。それらの検体は、スライドガラスに載せて染色した後、細胞検査士が顕微鏡を使って観察します。正常な細胞の中から、癌細胞だけでなく癌になりそうな怪しい細胞、感染を疑う細胞を探し出し、病理医と共に検討し報告しています。

近年、侵襲性が高く診断や治療に直結する検査が増加しています。当院ではこれらの検査の際には技師がベッドサイドに出向き、採取された検体をその場で標本にします。そうすることで有益な情報共有と、適正な検体を用いた精度の高い検査が可能になります。同時に、ともしれば検査室にこもりがちな検査技師も、患者さんに寄り添うチームの一員だと実感す



病理検査室スタッフ



松山細胞診症例検討会の様子

ることができます。

さらに癌治療の分野では、分子標的薬の飛躍的な開発に伴い、病理診断のみならず、薬剤の適応決定に必要となる免疫組織化学検査や、遺伝子検査の重要性が増しています。知識や技術のブラッシュアップは不可欠で、各種研修会や近隣施設との症例検討会を通して研鑽を積むとともに、学会発表や資格取得にも挑み、自己成長や人材育成につなげています。

日本人の2人に1人が癌に罹患する時代です。早期発見・早期治療に寄与する細胞検査士として、街頭での子宮頸がん検診啓発活動や健康展、児童らを対象にしたキャリア教育等の公益活動へも参加し、多角的視点を持った医療人となるよう努めています。今後も地域社会に貢献し、顔の見える細胞検査士を目指して尽力します。

緩和ケア認定看護師の 当院での役割

緩和ケア認定看護師 村上 美乃枝



悪性新生物(がん)は、平成28年の日本人の死亡割合で、死因全体の28.5%を占める結果となっています。その対策として、平成30年3月、「第3期がん対策推進計画」が策定されました。

看護協会では、平成11年に「患者と家族の苦痛を和らげ、その人らしく暮らせるための支援を行う」ことを役割として、緩和ケア認定看護師が認定されました。

当院では、平成19年に緩和ケアチームの活動が開始され、私は平成29年8月に緩和ケア認定看護師の資格を取得いたしました。緩和ケアチームのメンバーは、医師、看護師、薬剤師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士、社会福祉士、臨床心理士で構成されます。主にがん患者さんの身体的、精神心理的症狀の緩和に重点を置き、多職種で週に1回の緩和ケアラウンドを行っています。自宅療養を希

望される患者さんには、訪問看護課と連携しながら、継続したケアを実施しています。

がんと診断された時から、治療と同時に、より質の高い療養生活が送れるよう心身ともに援助が求められます。そのため、緩和ケア認定看護師の資格取得後、「緩和ケアリンクナース委員会」を立ち上げ、「その人らしく」をキーワードに、患者さんや家族に対し、トータルペインの視点でアセスメントを行い、一人ひとりに適したケアが提供できるように院内全体で取り組んでいます。

現在は、入院・外来を問わず、告知や治療方針の説明に立ち会い、面談を契機に、少しでも不安や疑問を解消し、今後の治療に向けた支援につなげられるように努めております。

がん患者さんがどこに居ても安心して生活を送り、自分らしく生きることができる体制づくりのため、緩和ケアのチーム医療を駆使し、患者・家族支援に尽力したいと思います。また、今後、強化されるがん対策に向けて社会連携を図り、地域における自院の役割を果たしてまいります。



多職種による緩和ケアラウンド